

当協会の胃がん検診における精検受診勧奨について

(財) 福島県保健衛生協会

佐藤 志保、吾妻 明子、村岡 英夫

【はじめに】 がん検診の大きな目的は、がんによる死亡率の低下である。そのためには、有効ながん検診を行わなければならないが、検診受診率を上げること、撮影者・読影者のスキルアップ、精検受診率を上げることなどが考えられる。有効ながん検診を行うために、保健師の立場から、過去 5 年間の胃がん検診の成績を基に検討した。

【対象】 平成 15 年度から平成 19 年度までの 5 年間に住民検診として当協会の胃がん検診を受診した延べ 417,974 人。

【結果】 要精検率を、過去 5 年間でみると 13.5%であった（男性 16.1%、女性 10.7%）。また、年齢階級別では、男女ともに、年齢が高くなるにつれて、高くなっており、いずれの年代でも、男性のほうが高かった。

精検受診率は、85.0%であった（男性 80.0%、女性 90.0%）。年齢階級別では、男女ともに、40 歳代から 50 歳代の精検受診率が低かった。特に男性の場合は、低率である。精密検査を受けない理由で最も多かったのは、「症状がない」で 54.2%であった。ついで、「都合で受けられない」の 23.0%であった。

がん発見率は、0.18%であった（男性 0.32%、女性 0.09%）。年齢階級別では、男女ともに年齢が高くなるにつれて、がん発見率も高く、いずれの年代においても、男性のほうが高かった。

【まとめ】 この結果から、社会的影響の大きい 40 歳代から 50 歳代の男性に強く受診勧奨を行なう必要があることがわかった。そのためには、現在の受診勧奨に加え、パンフレットを作成し精検未受診者に送付したり、住民検診事後指導会などの機会に情報提供をしたり、受診者本人に直接働きかけられる様な方法を適宜、考えていかなければならない。また、職域についても同様の傾向がみられたが、職域については、定期的な受診勧奨は行っていない。今後は、事業所に協力を求め受診勧奨を行い、その効果を検討していきたい。